

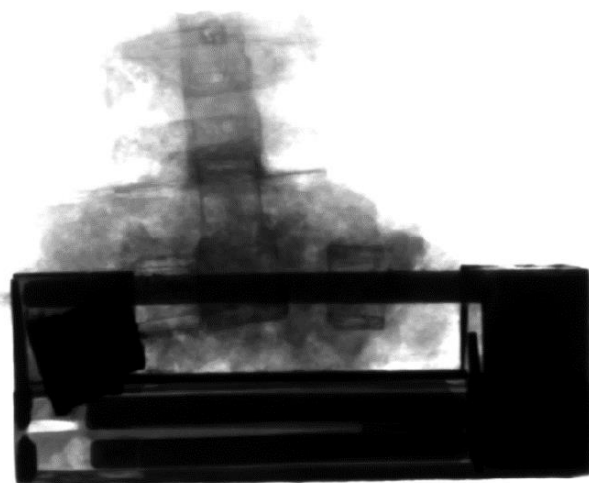
千々石ミゲル墓所推定地 第3次発掘調査について（その5）

2017年11月12日（土）、諫早市立たらみ図書館海のホールにて千々石ミゲル墓所発掘調査実行委員の主催による「千々石ミゲル夫妻墓所発掘調査実施報告会」が開催されました。当日は300人を超える人が集まり関心の高さがうかがえました。今回はこの会での報告をもとにして、9月12日の記者発表以降、新たに判明したことを中心にお伝えします。



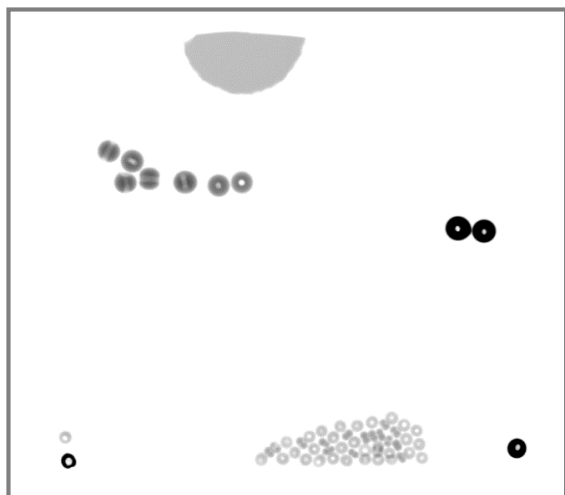
■ 墓坑について

まず今回発見された墓は「1号墓」とよぶことが確認され、被葬者は1体ということでした。その構造は二段掘りの石郭木棺墓で、20 cm前後の礫と土で木棺の周囲を囲み（石郭）、底から約30 cmまでは丁寧に石を積んで作られていたということです。木棺は長持を転用したもので間違いなく、施錠された状態で和錠が出土しました〔図1〕。発見された長持の金属部分（角金具）の場所から、そのサイズは縦・約100 cm、横・約50 cm、高さ・約50 cmであったと推測されます。地上部については墓石や戒名など近世初期の仏教の様式を用いているのですが、墓坑を含め地下部分については副葬品などの状況からキリシタン的な埋葬方法を用いているという見解が発表されました。



〔図1〕和錠のX線写真

■ 副葬品について



〔図2〕副葬品のX線写真

出土したビーズ玉およびガラス板の破片は、その多くが成分分析の結果からソーダ石灰ガラスとわかりました。また一部のビーズについては、鉛成分を含む鉛ガラスであるということが報告されています。左のX線写真において、黒く写っている部分が鉛ガラス、薄い部分はソーダ石灰ガラスを示します〔図2〕。

ガラス板と同時に出土した貝殻の一部とされていた白い破片は、これも成分分析の結果から鉛ガラスであるということが判明しています。また顕微鏡による分析により製作方法も判明しました〔図3〕。これらのビーズに

〔図3〕顕微鏡によるビーズの拡大写真 穴と並行して気泡が伸びており「引き伸ばし技法」を用いて製作されたことがわかる



は中央の穴の周囲に同心円状の傷があることがわかりました。この傷については当時ビーズとビーズの間に区切り珠というものを入れることがあり、それとの摩滅によって生じた傷ではないかということでした。また布状の断片も出土しており、当時キリシタンが使用していた聖遺物入れに用いられた可能性があるということで、今後の調査により解明が期待されるところです。発掘を監督された別府大学田中祐介教授の所見によれば、「これらは被葬者の持ち物としてのキリシタン信仰遺物であり、被葬者はキリシタンの埋葬習俗で葬られていることは確実」ということでした。

■ 人骨、歯について



〔図4〕



〔図5〕



〔図6〕

今回1体にあたる成人の骨の一部と歯が出土しています〔図4〕。歯は上あご13本、下あご11本の計24本、骨は頭骨の一部〔図5〕、大腿骨と脛骨が折り曲げられた状態で発見されています〔図6〕。

歯の解剖学的な所見からこの人骨は女性のものという可能性が高いということが発表されました。また、その年齢は歯の摩滅の程度より推定年齢35歳±10歳、すなわち25歳～45歳ということになります。また発見された頭骨は左側頭部のものと推定され、その点から考えると右側頭部を下に南側を向

いて、屈葬状態で埋葬されていたと推察されるということでした。そこで死後硬直のはじまる前に屈葬されていたのであれば、被葬者は墓所のある伊木力の地で暮らしていた可能性が高くなります。

■ 今回の発掘とその成果

今回の発掘調査によりこの墓所が大名級の上級武士の埋葬施設であるということが明らかにされたことで、晩年の千々石ミゲルは当時イエズス会が喧伝していた「枯れない雑草」というイメージから完全に解放され、亡くなるまで大村藩の重臣として、またキリシタンとして伊木力の地で誇り高い一生を送ったと考えられるようになったと、発掘の調査研究を統括された大石一久氏は語ります。また大石氏は今回出土した人骨は、推定年齢などを考慮するとミゲルの後妻の可能性が高いということを示唆されています。そしてミゲル本人の墓（地下遺構）は、今回発掘した墓坑の左側に存在するという可能性が非常に高いということです。

これらの点から同墓所は、もはや「千々石ミゲル夫妻墓所」と呼ぶべきという提言が大石氏よりなされました。今回までの発掘と今後の調査研究により、この墓所は天正遣欧使節に関する唯一の現存する証として存在意義を示すことになる重要な遺構であると大石氏は力強く述べられていました。

会の最後に千々石ミゲルのご子孫である浅田昌彦氏が「今回の発掘は一旦終わることになるが、今日が新たなスタートラインである」と挨拶されました。実行委員会形式で大きな成果を得た今回の発掘調査でしたが、また近いうちに新しい形で残る謎の解明がおこなわれる日が来ると思います。ご子孫の浅田氏をはじめとして関係者の皆様からは新たな決意を感じることができる会でした。

大石氏が述べられていますが、レーダー探査によれば今回発掘した墓坑の南側（墓石にむかって左側）の地下にも墓坑らしき反応（影）を見ることができます。「千々石ミゲル夫妻墓所」の今後の展開について、これからますます目が離せません。皆様も引き続き注目していただきたいと思います。



（写真左）ミゲル夫妻が晩年を過ごしたと思われる諫早市多良見町伊木力地区。左下が墓所、右上に大村が見える

（写真下）千々石ミゲル像 雲仙市



長崎県文化振興課 橋本 正信

資料および図版提供：千々石ミゲル墓所発掘調査実行委員会

ドローン画像提供：株式会社オリエントアイエヌジー（旧九州オリエント測量設計株式会社）